

# 低炭素社会における移動文化の新展開 —〈観光×趣味〉の視点から—

## Trends of Mobility Culture in the Low Carbon Society :

### A Frame of Reference to “Tourism and Hobby”

研究代表者：関西大学社会学部教授 岩見和彦

Kazuhiko Iwami, Professor, Kansai University, Faculty of Sociology

共同研究者：南裕一郎 Yuichiro Minami, 塩見翔 Sho Shiomi, 奥野圭太郎 Keitaro Okuno

本研究の狙いは、人々が自己（の身体）を移動することで達成しようとする価値（目的価値・手段的価値）をめぐる振る舞いと意識を「移動文化」と捉え、低炭素社会＝近未来社会においてそれがどのような展開をみせるかを探ることにある。若い世代の趣味価値が新しい観光を生み出す、という仮説のもと、まず、アニメ人気に連動して話題になっている「聖地巡礼」ブームを取り上げる。〈観光地の発明〉といってもいいこの新しい流れに関し、実地調査を通して文化社会的な考察を試みる。ついで、現代人の「趣味・嗜好」が移動文化に及ぼしているもう一つのフィールドとして「鉄道趣味」の世界、とりわけ「乗り鉄」と呼ばれる人たちの移動行動を取り上げる。ここに見られる「移動メディア」（移動を可能にする乗り物）への一途な「選択」、経路や鉄道網へのナイーブな耽溺には、移動文化の古くて新しい、より豊かな地平が映し込まれているはずだからである。

The purpose of this study is to investigate how mobility culture will develop in the near future low carbon society. We can define mobility culture as a manners and a consciousness in connection with the value in which people attempt by moving their own bodies. On the assumption that the hobbies and the values of youth create the new tourism, we would like to explore the next two topics: anime pilgrimage and railfan. Anime pilgrimage movement is an interesting case of the Invention of Tourist Spot; we thus study from the viewpoint of cultural sociology through the field survey. Likewise, railfan's world (*noritetsu*) is a sphere in which individuals' hobby and taste influence on mobility culture. In other words, there is no doubt that their single-mindedness to mobility media and their indulgence in railway routes reflect a new phase of fertile mobility culture.

#### 1. 研究目的

人の身体的移動（「バーチャル移動」とは区別された）は、現代社会においても買い物、通勤・通学、出張、単身赴任などを想起すれ

ば明らかな通り、生理的・社会構造的に条件付けられたものがほとんどであるといえるかもしれない。しかし、だからこそ、現代社会にあっては自らが欲望するところの移動行動

が価値を有する。

〈観光〉とは、人間が余暇時間を利用して目的地まで移動するという行為であると同時に、その社会のありようを表象するメディアとしても捉えることができる。すなわち、観光地の魅力が集合的に共有されたときに、それが人々の心情に影響を及ぼし、集合的な同一性を支え、人々を関係づける。その意味で観光は、移動文化・移動価値の変容を、空間的広がりの中なかで表現する先端的な社会現象といえる。観光資源、観光立国といった産業振興的まなざしも、そうした前提のもとで有意義なものだという点を忘れてはならない。

人々の〈観光〉行動としての「移動文化」といっても、その内包は多様で、したがってその分析も一筋縄ではいかない。こうしたなかにあって本研究が注視するのは、社会の〈趣味〉化という視点である。現代社会にあって消費を駆動する文化的欲望も、情報縁を求めつながり欲求も、この〈趣味化〉という力学を抜きにして解読することは不可能である。かつての仕事主義に従属する余暇価値とは異なり、〈趣味〉は「自分が何者であるか」を語るうえできわめて重要な「要素」になっている。とりわけ若い世代にとって、これは自分探しや居場所探しに直結する「自らが作らなければならない属性」としてある、かのようなのだ。

このような問題意識と仮説を踏まえたうえで、移動行動の中なかの〈観光〉と〈趣味化〉とをクロスすることで見えてくる、若者たちが分泌する移動価値や移動の振る舞いを観察・分析しながら、来るべき時代・社会の「移動文化」の展開のありようの一端を考究してみようというのが、本研究の狙いである。

## 2. 研究経過

本研究グループで扱うテーマは3つある。

### (1) 《趣味》が観光地を「発明」する：アニメ聖地巡礼を中心に

現代人は、これまで定番と考えられていた名所、旧跡、温泉、テーマパークとは異なった、「マイブーム」といった言葉に象徴されるような「自前の世界の構築」に大きな関心を示し出してもおり、その動向はいろいろな形で現象している。こうした〈観光地の発明〉といってもいい流れとして、「アニメ聖地巡礼」を取り上げ、その文化社会学的な意味合いを追究するための関連調査を行った。代表的な聖地として『らき☆すた』と関連する旧鷲宮町（現久喜市）の実査に加え、ワンダーフェスティバルなど、現代の若者のサブカルチャー志向の「リアル」を観察するためのフィールドワークを試みた。（宮城県七ヶ浜町（アニメ『かんなぎ』の聖地）は被災状況がひどいため入れなかった。）

### (2) 移動手段（乗り物）の選択自体が《趣味》になる：乗り鉄を中心に

鉄道趣味の欲望、とりわけ「乗り鉄」と呼ばれる趣味行動は、まさに「移動文化」に直結するフィールドである。本年度は、一つに、鉄道ファンとの同行調査や様々な鉄道に見る「乗り鉄」調査を実施した。二つ目に、全国の大学の「鉄道研究会」活動の現況に関するインタビュー調査を通して、鉄道趣味人のリアルな語りから、「鉄道」の記号論、「鉄道趣味」の社会化過程やアイデンティティの問題などに関する考察を進めるための予備調査を精力的に行った。

### (3) 観光《趣味》がブランド化する：「古都=京都」の神話と構造

上述の2つのテーマが、《趣味》化がけん引

する新しい観光行動に注目するものであるのに対し、「伝統的な価値」が趣味化社会の中で支持され続けるためには、一般の消費財同様、価値の普遍性を称揚するような仕掛けと同時に、新奇性を再発見するための絶えざるバージョンアップとモデルチェンジなどの工夫が図られなければならない。

最強の観光ブランドとしての「京都なるもの」への強い人気の背景を問い、京都への「観光のまなざし」がどのように推移してきたかを明らかにするために、京都観光をめぐる観光者と受け入れ側（地元住民、観光行政、観光業者）との相互作用、古都としての京都イメージを伝えるメディアなどへの考察を試みようとした。

以上の3つのテーマについて、数度にわたって研究会・研究合宿を実施し、担当者による調査研究の進捗状況の報告、調査方法、結果の分析と考察をめぐる意見交換、討議を重ねた。

### 3. 研究成果

今年度は、各テーマと関連するデータの収集、現地調査、資料整理に多くの時間を費やすこととなった。以下、テーマ毎に成果（確認できた事柄）の一端を示す。

(1)アニメファンたちによる観光地の発明とその行動に、「聖」地と呼ぶ心性、痛絵馬をめぐる表現行為と関連させながら考察を加えた。1995年の「天地無用！」の放送開始以降、岡山県金光町の太老神社等の巡礼行為を「聖地巡礼」と呼称したのが嚆矢とされるが、その後拡大解釈されて、今や全国各地、数多くのポイントが「聖地」としてマークされるに至っている。しかし、安易に「ブーム」を煽っている実態もあることを明らかにした。

また先行研究(29編)を検討した結果、①若者を中心とした集客を狙うための町おこし、地域おこしのための、政策学的な研究、②エコツーリズム、医療ツーリズム、スポーツツーリズムなどと同様に、観光の新しい形態の一つとしてみる観光社会学的な立場、③アニメ及びインターネットのサブカルチャーと連続したものとして捉える文化社会学的立場、④(バーチャルな世界の)コミュニケーションを通じて、現実世界で興味を同じくする者同士が交流するメディア論的立場、の概ね4つのパターンに分類することができた。しかし、いずれも現象の部分的な切り取りの感は否めず、時間をかけた慎重な考察を要することが確認できた。

(2)国鉄の「全線完乗」を2度達成したあるベテラン鉄道ファンと鉄道趣味の実践現場(大井川鐵道、ひたちなか海浜鐵道)に同道し、氏からの聞き取りを行うことを試みた。また各種の鉄道において「乗り鉄」の存在・行動を確かめるために、ローカル線(近江鐵道、信楽高原鐵道、明知鐵道)、路面電車(万葉線)、廃車予定電車(千葉県の113系)、希少車(JR磐越西線583系)、廃線予定(十和田観光電鉄)、被災鐵道(JR八戸線、三陸鐵道北リアス線)、日本最長距離普通列車(JR根室本線)、3月ダイヤ改正による引退劇(山陽新幹線・JR御殿場線・小田急線)に出向き、観察中心のフィールドワークを実施し、ファン現場を体感した。

大学鉄道研究会への訪問調査については9大学に出向き、各種聞き取り調査を行った。この調査はさらに、全国の「大学鉄道研究会」会員を対象にしたアンケート調査(2012年実施予定)の質問内容の設計と実施準備の打ち合わせのためのものでもあった。

(3) 人の観光行動には、目的地の「(広い意味での) 魅力」がそのインテンシブ(移動を促すプル要因)となる。従来、その魅力を指示するものは観光商品のカタログや、マスメディアが提供する「物語」であった。なかでも強力な物語を発する古都=京都の魅力はどのように語られてきたのか、どのように語られるとその地が魅力あるものとなるのか、という視点は観光研究には欠かせないことが確認された。

京都市観光調査年報(1970年～)、JR東海「そうだ、京都、行こう。」(1993年～)などの資料をもとに、「京都」を素材にした観光文化社会学的な考察を進めることが、移動文化・観光価値が生成・積層されていっている状況を幅広く見据えるうえで、有効かつ不可欠だと考えて、目下鋭意データ整理を行っている。今年度は主に、関連する統計資料、各種文献などの収集と整理を行った。

#### 4. 今後の課題と発展

3つのテーマはあまりにも個別的に過ぎるかもしれないが、これまで必ずしも原理論をもたないまま断片的に論じられてきた観光学(観光社会学)と趣味の社会学(趣味化社会学)を、「移動文化の社会学的研究」という枠組みの中に位置づけ直すことは、近未来の文化のありようを考える上でなにがしかのインパクトを与えることができるものと思っている。

趣味化社会における人々の観光行動の変容と更新の道筋を予想するためには、いずれのテーマに関しても、多様な実態を踏まえた慎重な考察が必要となってくる。くわえて、骨太な現代社会論(たとえば、物語消費からデータベース消費へ:東浩紀、仮想の時代にお

ける「古典的な現実」への飢え:見田宗介など)の理論的フレームを準備することも必要である。

われわれの〈観光×趣味〉の視点からの問題提起と研究意図がより具体的に届くよう、更なる研究とその新たな展開への取り組みを地道に試みていくことが必要だと考えている。

#### 5. 発表論文等リスト(関連研究を含む)

- ・塩見 翔、「青少年の『趣味的社会化』に関する一考察—鉄道ファンのライフヒストリー調査から—」『人間科学』75号、関西大学大学院院生協議会、2011年9月
- ・塩見 翔、「現代の大学生における〈趣味〉と〈研究〉—『鉄道研究会』での調査を中心に—」日本教育社会学会 第63回大会、2011年9月25日、於:お茶の水女子大学
- ・塩見 翔、「大学鉄道研究会における女性会員にみる移動趣味の〈いま〉—インタビュー調査からみえてきたもの」『Zero Carbon Society 研究センター紀要』第1号、Zero Carbon Society 研究センター、2012年3月
- ・奥野圭太郎、「最新の『NHK 意識調査』から読み取れる、若者のアニメ聖地巡礼行動」『ものがたり観光』第1号、ものがたり観光行動学会、2011年10月
- ・奥野圭太郎、「旅行業界におけるクレマーの意義に関する社会学的一考察」『旬刊旅行新聞』第1452号～、旅行新聞新社、2012年2月21日～連載継続中(～10月までを予定)
- ・南裕一郎、「スマートグリッドの動向に関する一考察」『人間科学』75号、関西大学大学院院生協議会、2011年9月